

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一週一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投函) 誌第三五二号
昭和四十六年十二月二十五日印刷 昭和四十七年一月一日発行



第三十八卷

第一号

1972

1

正 月 号



一 目 次

表紙「当麻曼荼羅縁起絵巻」松涛達文画

御題「山」に因みて……………	岸 信 宏…………	(2)
〈浄土文化講座より〉ディスカバー念仏……………	寺 内 大 吉…………	(7)
私と「健康」……………		(12)

〈大野法道・高島寛我・中島真孝〉
佐々木孝丸・森赫子

聖典解説①一枚起請文講説〈その1〉……………	井 川 定 慶…………	(18)
修正会法話・ひとすじに生きる……………	高 橋 信 道…………	(20)
孝子善之丞物語⑥……………	吉 田 光 覚…………	(22)
科学の進歩と念仏……………	上 田 貞 雄…………	(24)
異僧「真覚」第一回……………	柴 田 六五郎…………	(26)
子の年……………	安 居 香 山…………	(29)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて《良暁》……………	田 中 祥 雄…………	(32)



語和声念

＜心を正す月＞

門松は冥途の旅の一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし

元旦を迎える毎に、いつも思い出されるのは、一休禪師のこの有名な歌である。最近では、正月といっても門松を立てるとか、食物にしても、雑煮や七草粥をかならず決まった日に食べるといった習慣はうすらいできている。むかし私たちの先祖は、新年は新春として印象のつよいものであり、新年は文字の上や暦の上ばかりでなく、生活感覚的に万事のはじめであった。正月の元旦が、歳のはじめ、月のはじめ、日のはじめとして「三元」「三始」とよばれたが、単に暦数の感覚から「元」といわれる以上のものが感じられたことであらう。

このトシを年と解するのは現代人の感覚であるが、本来「年」というものは物理的時間的意味でとらえられたのではない。それは、春の種下しから秋の取り入れまでの間が「年」とされたのである。生活の場における具体的な内容をもってとらえられている。だからトシ神は、五穀とくに米の実りゆたかに保障してくれる神だとされたのである。門松にしても「年の松」を伐って来ることは、「松迎え」とか「正月様迎え」とかいわれ、松を倒すことを「正月様送り」とよんでいた。このことは、正月様たるトシの神が松によりますとの信念にもとづいていたのである。

現代人は、生活事象から生まれでた行事を捨て去るばかりでなく、その心まで失ってしまうことは寂しいことである。元旦は年の流れからいえば、昨日と今日という現象的变化にすぎないが、一年の変り目であり、再出発と感覚的にとらえるとき、移ろい変りゆくすがたを元旦にあたり、しっかりと認識することが大切ではなからうか。現に生きている私が「こうしてはおられない」という決意が湧きあがってくるのであり、過去を反省して「心を正しく置き直す」ことが大事である。新年におこなわれる修正会は、このような意味からして、古くより「悔過修正」の式がおこなわれてきた。人びとは諸国の国分寺に吉祥天を祀って、改めて過去の誤りを反省懺悔して、心を正したのである。まさに、正月は、仏教的にいうならば、「心を正す月」の意味である。

御題「山」に

因みて



——浄土門主——

岸 信 宏

御題
山

釋迦牟尼にみほと説きませる
わしのみ山哉仰きみるかな

昭和四十七年の新年の御歌会始の御題は「山」と仰せ出されています。日本で山と言え
ば富士山を第一にあげるでしょう。富士山については昔からいろいろの伝説があり、又多
くの文人墨客によって、文に詩歌に絵画に美しく表現せられています。

私は時々地方へ参りました節、その地の山河の景觀に接することが何よりのたのしみで

あります。中でも印象の深いのは九州では阿蘇、雲仙の山々、四国では石鎚の山系、山陰では大山、北陸では立山、白山などの山系、殊に親不知の海岸線のトンネルを越えた車窓に忽然として現われる鳥海山、信州路に見る木曾の山々、日本アルプスの山系、東北地方では岩木、岩手の両山、北海道では函館に近い生駒山、阿寒湖畔に見る雄阿寒、雌阿寒などの景観が印象に残っています。まだ見ぬ有名な山々もありますが、日本列島を空とぶ飛行機の上から見ますと殆んど山系の連続であります。

今日、山へ登るいわゆる登山家は多いですが、多くはレジャーを主にした運動のためのようです。昔の登山は山を拜むための一種の信仰から来ているのであります。これを自然崇拜とか山岳崇拜とか申しています。中には山そのものを御神体としている所もあります。大和の三輪の明神とし信仰を集めている大神神社の如きがそれであります。山々をめぐってそこに祭られてある神々を拜む山伏の行者、修験道の如きも、単に次元の低い自然崇拜の宗教信仰として扱ってしまうことのできないものがあると思います。そこに東洋の汎神的なる宗教信仰の一つの特色があります。日本古来の八百万の神々の信仰、仏教の一切衆生悉有仏性、草木国土悉皆成仏の思想の如きも、汎神的なる東洋的な思想に根拠をもつものと思われれます。

私共仏教徒に取りまして、なつかしい山に霊鷲山（りょうじゅせん）というのがあります。単に霊山（りょうぜん）とも呼ばれ、或は鷲の御山とも呼ばれています。特に霊山という名称は我が国の山の名や、寺の名に多く使われています。京都東山の一部、高台寺のある附近を霊山と呼んでいるようでありまして、近年高台寺の境内に造られた大いなる観音菩薩の露出像を霊山観音と称し、今次大戦に於ける戦病死者の遺骨や霊牌の奉安所となつていたのであります。

インドの国は北辺に千古の雪を頂くヒマラヤ山系（大雪山）があり、中央部に高原地帯があり、他はガンジス河とインダス河に添うた大平野の国であります。霊鷲山は中央部の高原のラジギールという土地にあります。ここに昔はマカダ国という国があり、その首都を王舎城といい、その近くにこの山がそびえています。あまり高い山ではありませんね。この山の頂上の広場で釈尊は長らく多くの弟子達に法を説かれたのであります。晩年には自分の郷里である北方の郷里カピラエ国に帰って説法せられたのであります。浄土の三部経の中の無量寿経と観無量寿経とは王舎城で説かれ、阿弥陀経は北方の舍衛城で説かれたことになっていきます。観無量寿経に説かれた原始仏教々団の悲劇が浄土教を説かれる因縁となったのであります。即ち釈尊が霊鷲山に於て御説法当時の事であります。マカダ国の王子アジャセ太子が、早く国王の位につこうとして、父ビンバシヤラ王を七重の牢獄に幽閉して、その自然死を待つという惨虐なる行爲を行ったのであります。これは釈尊の教団の盛えて行くのをねたんだダイバ尊者のそそのかしによったのであります。ダイバ尊者は或時は釈尊を殺害しようとしたのであります。アジャセ太子が失敗に終わりました。

今又アジャセ太子を早く国王につかして自分勝手な政治を行わしめようとしたのであります。母イダイケ夫人だけは牢獄を訪問することができましたから、夫人は自分の装身具に蜜などの食物をひそかに隠して国王に差し上げて居りましたから、ビンバシヤラ王はいつまでも亡くなることがなかったのです。そこでアジャセ太子は母イダルケ夫人をも殺そうとしたのであります。時にギバという大臣が母をも殺すという大逆をいさめて、そのことなきを得たのであります。イダイケ夫人は王宮に幽閉せられて外出を禁ぜられたのであります。夫人は釈尊を御招きすることができて、このような苦しみの世界をのがれる道はないものでしょうかとお尋ねをしたのであります。そこで釈尊は阿弥陀仏の極楽世界

こそ私共の生きるべき真実の世界であることをのべられたのであります。ここに浄土教の開顯があり、その浄土へ往生する念仏の道が示されたのであります。

私が印度へ赴いたのは昭和四十一年の二月でした。釈尊が成道せられたブッダガヤの聖地に建つ根本大塔の周辺には仏教圏各国の寺院が建てられてあって、その国からの参拝者のために宿泊等の便宜を与えているのでありますが、日本仏教徒のためにはそうした便宜の施設がないのであります。そこで印度日本寺建設委員会というのができて、その予定地に先ず宝篋印塔を建設することとなり、その落成法要を全日本仏教会で行うこととなり、当時会長でありました私が団長となり、一行五十名程がインドに赴いたのであります。二月二十四日に羽田空港を出発し、その日の夕方、カルカッタにつき、同地に二泊して、二十六日、グッダガヤにつきました。翌二十七日、日本から運ばれて、すでに建設を終えた巨大なる御影石で造られた宝篋印塔の落成慶讃の法要を行ったのであります。ブッダガヤに二泊した私共は、二月二十八日にマカダ国の首都王舎城のあったラジギールに向ったのであります。午前九時、自動車にて出発し、正午頃高原地帯の靈鷲山のふもとにつきました。車を降りて私共仏教徒に親しみ深い靈鷲山の登山道路の前に立って、山を仰ぎ見るのであります。この登山道路をアジャセの道と呼んでいるとのこと。アジャセも後には前非を悔いて、釈尊に教を乞い、開法のために通った道であると伝えられています。その登山口の一区画にギバ大臣の病院の址という札が立てられてありました。ギバ大臣はアジャセ太子が母をも亡きものとしようとしたことを諫めた大臣でありますが、この大臣は医師でもあったのです。

王舎城のあった址には、釈尊入滅二千五百年の記念に、印度政府が、余り大きくありませんが、宿舎の設備をしてくれたのであります。私共一行はそこで午食をすまし、午後一

時から自動車で一時間程を要する所にあるナールンダ大学の遺蹟の見学に行ったのであります。この大学は五世紀の初頃にグブダ王朝の帝王王（たいにちおう）によって創建せられ、七世紀の始に支那から玄奘三蔵が入竺した頃には僧房三千、学徒一万と称せられる程の一大学林であったのです。十四世紀頃まで存続したのですが火災のために焼失し、その後廢墟となっていたのを、英領植民地時代に発掘整備せられたのであります。発掘の際の遺品は傍にある博物館に多数陳列されています。

一行は午後四時頃ラジギールに帰り、靈鷲山の登山に出かけたのでありますが、私共少数の者だけは他に用事があつて登山をやめました。山上は岩山ですが広場になつて居り、そこで釈尊は多くの弟子達に説法をせられたとのこと。又山の中腹にはピンバシャラ王が幽閉せられた牢獄のあとが確認せられているとのこと。

私は王舎城址の宿舎の庭に立つて、靈鷲山系の山々を眺めながら、釈尊当時のことをいろいろと想像して見るのであります。

釈迦牟尼のつねにみ法を説かれたる鷲のみ山を仰ぎみるかな

○
靈鷲山容一脈連（靈鷲山容、一脈連なる）

旧都王舎大城天（旧都、王舎大城の天）

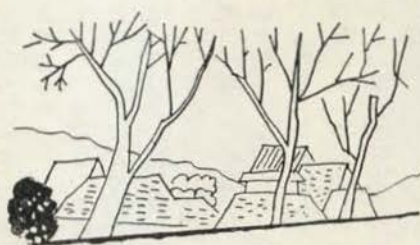
国宮旅宿夕陽裡（国宮の旅宿、夕陽の裡）

愛見苑中花正妍（愛見す、苑中、花、正に妍なり）

第十一回「浄土文化講座」より

デイスカバー念仏

寺内大吉



私も浄土宗の寺に生まれ育って今日までお仏飯を食んで来たのでありますが、ただ途中で生き方が皆様とは少しく変った文学の世界へ行き、またその中でも枝派の方へと進みましたが、ただ私が日頃接している世界は何と云うか庶民大衆というような方面で、その意味で皆様とは多少異なった立場からお念仏というものを具象化できるのではないかと思うわけです。もちろんそうした私自

身の生き方から、現時点においてはっきりとした結論がでたわけではありませんが、私自身これから念仏の再発見を進めて行きたいと思ひますし、今日は今まで感じて来たことの一端を述べさせていただきます。

私の寺の本尊様は丈六の金銅仏でもちろん阿弥陀如来像ですが、これは享保年間に造られたものなのです。私の村——今では都内世田谷区なのですが——には古くか

ら言い伝えがありまして、子供の頃村の古老から聞いたところによりますと、大吉寺の本尊様は立ち上って避難した、ということ、これは伽藍が火事になった折に火を避けて裏の竹藪に避難されたというものです。成程、今から百五十年ばかり前に大吉寺の伽藍は全焼致しました。昔語りによる当時の有様は、大吉寺の本堂がメラメラと焼け落ちて、当然五百貫程の本尊様も劫火の中で溶けてなくなってしまったことであろうと思つて翌朝焼け跡に行つてみると、焼け落ちた伽藍の裏の竹藪の中に、本尊様がちゃんとお坐りになっていたということです。

しかし寺にとつては大変有難い伝説なのですが、阿弥陀様が実際に立ち上って逃げたなどということは、私にとつては何か腑に落ちぬものがありました。ところが、三年程前から伽藍を改築するにあつて本尊様に境内の片隅の仮小屋の中でお暮し願つた際、本尊様のお身体を調べたのですが、蓮台（台座）にびっしり名前が書き込んであるわけです。これは要するに、当時の住職の発願によつて成つた尊像でありまして、往時の江戸市中あるいは全国各地を回つたかもしれませんが、一軒一軒の貧者の一灯というか、その信心の家の先祖の戒名や俗名に託したお布施によつてできた阿弥陀様であるわけ

で、その様々の名前がこの蓮台に書き刻まれているのです。しかもよく調べますと、尊像のお尻の部分の台座の名前が消えておりまして、その磨滅したあとを再び塗り直して修覆してあるわけです。思いますに、これは火災の折にお尻に火がついたのではないかと。本堂は南向きですから、北側の後部の縁の下で乞食かなにかが焚火をして、その火の不仕末から火事となり、床を燃し、最初に本尊様の尻に火がつき、本尊様はひっくり返つたのではないかと。そして羽目板を突き破つて、ズッデンドウ本堂裏にころげ落ちたのではないでしようか。為に火災をお逃れになつたのではないかと、私思うわけです。

こう解釈すると今日の人間にもいささか納得が行くわけです。しかしこんなことを言うと、折角寺に伝わつた縁起をぶちこわすことになるのではないかと、折角寺に伝わつたが、私はこちらの方が、より信仰の心を象徴するように思われるのです。それは、火災の折、なぜこうした偶然が起つて本尊様が助かつたのでしうか。それは丁度蓮台の磨滅して消えた部分の信心の施主達の真心が阿弥陀様を生かしたのではないかと。この話の方が遙かにリアルティをもつて現代人にも得心が行くのではないでしようか。お念仏の功德というように、今後益々そうし

たリアリティというものが必要であろうと思います。

一昨年私は雑誌の仕事で三回に分けて四国の八十八ヶ所をお巡りしたのですが、ところが現代のお遍路さん、やはり願い事を願かけしております。お堂に名刺などを貼って、「リュウマチ」などと書き込んでおります。恐らくこれはリュウマチを癒して欲しいとの願い事なのでしょう。しかし一番ビックリしたのは、半紙の半枚分に活版印刷を施したものをベタベタと貼ってあるものがありまして、「私の亭主は極道者で私という女房がありながら他に女を作って逃げて行っていました。どうかお大師様、亭主に仏罰を与えて下さい。右極道者何某」などと書いてありまして、亭主の生年月日まで書いてあるわけです。恐らくこの鬼婆、印刷された八十八枚の願かけをふところに入れてお遍路に旅立ったのにちがいないのですが、一番最初からどんどんベタベタ貼って歩いたのでしょうか。土佐高知などにも随分貼ってありました。私はそれから一ヶ月半程して香川讃岐の大久保寺などから逆回りをしてみたのですが、実はこちらには貼っていないのです。あれから一ヶ月半も経ったのに婆さんどうしたのかと、私としても何だか随分気になってしまいました。そこで更に逆回りをしながら、伊予松山の方へと

経巡りましたが、全然貼ってないのです。そうこうしているうちに、愛媛高知の県境、須雲でしたか、この附近のお寺さんで最後の一枚を発見致しました。婆さんどうしてここで終りにしたのだろう。婆さんへばちまったのではないか、あるいはここで引き返したのか、色々と思いを馳せたのですが、そこはまた私も善意に解釈致しまして、婆さんのろいをぶちまけてベタベタ貼り散らしている間に、何てバカなことだと気が付いたのではないだろうか、と思われたわけです。

あのお遍路回りというのはよく同行二人と言われまして、札所をずっと回っているうちにアベックの相棒と一緒に歩いてくれるという伝えがありますが、それが弘法大師の信仰であり、恐らく嫉妬に狂ったこの婆さんの隣りにも弘法様が一緒に歩くようになり、婆さんのこうした願い事の虚しさを説かれたのでしょうか。そして、スッパリ止めた婆さんは清浄な心持ちで残りの札所を回り終えたのではないのでしょうか。こういう推理を私は立てたのですが、また四国八十八ヶ所回りの行の持っている高い機能というものも、そういうところにあるのではないかと推察したわけです。やはり現在の時代は変わっても、行の尊さというものは沢山の功德を持っているのではな

いかと思います。

よく浄土真宗即ち門徒の講演会などにまゐりますと、二言三言話しますと、前に居並んでいる婆さん達がナムアミダで、ナムアミダブと唱えるわけです。私など色々エロ話を致しますが、エロ話を一言話す瞬間にナムアミダブとやられます。何か拍子抜けするわけですが、念仏というものも種々な多様性を持った面を含んでいるようです。

それにしても、仏教の言葉や文章は非常にむずかしく、私どものようなものには理解しかねるものが多々あるわけです。極く簡単な言葉の中にも、複雑な意味内容が含まれているのです。例えば、聖徳太子の十七条憲法の中にも、「篤く三宝を敬え」とありますが、それでは実際に仏とは何ぞ、法とは何ぞ、僧とは何ぞと問われた場合に、どう解釈したらよいのか誠に難解であるわけです。また、お釈迦様は菩提樹下でお悟りを開かれたわけですが、それではどういうことを悟られたのでしょうか。

たまたま今、三宝のことを話したわけですが、お釈迦様はお悟りを開かれた後、四十九日に渡って迷われたと言います。それは、この悟りを世界の衆生にいかに説明しようかという迷いであつたようです。私は、ここにお

いて仏法僧ということを思いつかれたのではないかと考えるわけです。自分の中にある仏性というものの、これに対する深い尊敬、仏性の発する慧即ち法、しかもこれを実行しようとする愛に満ちた人間、僧ということが、まずお釈迦様の基本にあつたのではないかと思うわけです。仏教の根本はこのように単純素朴であると思うのです。そういう意味では、法然上人のお念仏は明解卒直に教えを説いているだけに、非常にわかりよいと言えます。しかもその明解卒直な姿勢というものは、一つのはっきりとした思想が根差していることの証しなのです。確かに人間の仏教という点については、鎌倉時代の法然、親鸞、道元においては、極めて強い自覚と意志があり、本当に日本人が思想を持って来たということだと思ふのです。

さて、私は生来ギャンブルというものが好きで、これまでも色々やってまいりましたが、その中で教えられたこともまた非常に多いわけです。ギャンブルというものには勝負ですが、宗教というものも一つの人生、人間の勝負ではないでしょうか。お念仏もこれまた、あーも考えられるこうも考えられるというようなものでは本當の念仏ではなく、阿弥陀様にひとえにお救い願うとい

う、競輪言葉で言えば、いわゆる一本買いでなくてはいけないと思うのです。法然上人は阿弥陀如来をよすがに、法の為にすべて一本で注ぎ込まれた人と言えるかもしれません。

あの平安時代の末期に念仏を考えだした法然上人の偉大さは、民衆が定まらぬ思いをあれやこれやと抱いている中で、一人南無阿弥陀仏という言葉を選び取って、そこに何の疑心も起さずに、信じ切れたという強い確心に満ちた姿勢にあると思うのです。そして法然上人の念仏の仏教は、世界の衆生に平等に分ち与えんが為の教えであつたと思うわけです。

念仏というものが一つの行であるならば、それは学問の場合からは決してでて来ないのではないのでしょうか。競輪や競馬の必勝法で、過去のデータだけを調べても何にもならないのと同じようなことで、やはり念仏というのは、明日への前進、生きた人間社会の中でどのように生きた念仏を唱えるかということが、重要なテーマであると思うのです。私自身もこれから、俗な言葉で言えば、身体をはって庶民大衆の中へ入り、念仏の何たるか、庶民は一体どういう念仏を望んでいるのか、ということを見出して行たいと思います。(文責 編集部)

『当麻曼茶羅縁起絵巻』より

鎌倉大本山光明寺蔵

この縁起絵巻は、奈良当麻寺に伝わる極楽浄土曼茶羅が中将姫と呼ばれる一女性の発願によって織りなされる由来を描いたものである。伝えによると、天平の昔、横^{よこ}佩^はの大臣の姫は仏法に帰依し当麻に入り、称讃浄土經を書写して、生身の阿弥陀仏をみることを祈願したところ、一人の老尼が現われ、仏の姿をみせてあげようと蓮糸を集めさせ、井戸を掘って三色の糸に染めあげたのである。そのうち、一人の女が来て一夜のうちに浄土曼茶羅を織りあげ、五色の雲のうに去ったが、老尼は姫に曼茶羅の奥義を姫に説き、同様雲のうに去ったのである。この老尼は阿弥陀、女は観音の化身であつた由、のち姫は臨終の時、阿弥陀聖衆の来迎にあずかったというこの絵巻は上下二巻からなり詞絵各三段からなる簡素なものであるが、普通横につなぐ紙を縦に用いた堂々たる体裁となっている。また謹厳な描線からみて女絵系統の作品であることがわかる。鎌倉中期の作。(国宝)



私の『健康』

大野 法 道

(大本山増上寺法主)

私の健康と題しましたが、之は実は編集部から与えられたものであります。これについて思うことは、健康ということとは私だけではなくて、皆様にも同じことが言われるのではないのでしょうか。現在病の床に臥していたり、過去に病氣したことのある方は別として、今健やかな日々を送っている人には、こうした題が当てはまると思われませんが、ここでは課せられたままに、之について少しばかり述べてみたいと思います。

まず第一に長寿ということが問題になると思います。ところが長寿というのは永生ぎであるが、実は一定のものであるわけがなく、ただ比較の上のことにすぎない。六十歳からは短命と言わねばならないし、八十の人なら長命というべきだ

としても、九十の人も少数はあるのであるから、つまり長寿とは他に比べての言葉であって、それ自身は余程永生ぎでないかぎり、そうは言われぬことでありましよう。ところが人々は各が生涯をもっているのは確かであるが、その限度は何人にも判らない。特別の故障のない限り寿命は続くが、その終りを告げるのは何時であるかということは知りうる限りではないのであります。しかも人々は生きる意欲の本能があつて、明日をも知れぬわが命が存続を信じて、心の中では明日を期して走りまわっている。中には世の無常、非常事態の勃発を気づかうかのように、現実根拠を置いている人もある。

次に問題となるのは、健やかに生きることである。私の経験では、自然にあるがままに流されて行くことが大切であると思う。わが針路について、頭を使用することなく、環境のままに従って、励みさえもっていればよいとすべきであると

思います。

私も四十九歳の時に病気をしました。伝通院で講演をして帰ったら来客があり、失礼して床についたのが始まりで、漸次に重くなり一週間後には重態になりました。医者は肺炎との事であったが、熱が下らぬので他の医者を迎えたところ、之は膿胸でしかも手遅れであり、至急に手術をせねばならぬと、順天堂を紹介して下さって、手術まで持てばよいがとのことであつた。寺を出る時に、見送りに来て下さった小林寛禪氏は、之が永久の別れかもしれぬと、ひそかに念仏申された、後日に述べられました。それがすべてが順調に終つて、二カ月で退院することができました。まことに危機一髪のところまで行つたのでありますが、幸にも生き長らえることができたのであります。

高 畠 寛 我

(元仏教大学長・文博)

私は幼少の頃から、所謂、蒲柳の質で、あまり丈夫ではなかつたですが、学校はあちらこちらの学校へ入り、まづまづ無事に卒業しました。大正二年、宗教大学を卒業してから、

大和の法隆寺へも一二年余り勸学院にて佐伯定胤和上の講義を聞きました。その後、京都大学の梵文学科を出で、仏教専門学校につとめ、大正十五年六月、浄土宗留学生の辞令を頂いて、仏国巴里に二年半程就学、ソルボンヌ、国民図書館に通いました。余暇に英独等を旅行しましたが、この欧州生活で、よく運動したためか、身体が少々肥えて来たようです。

昭和三年十一月、巴里を出で、帰途印度仏跡巡拝を了えて昭和四年一月帰朝しました。私は前述の学業中、先師等の勸めで、摂津の奥池田の当時あまり便利でなかつた山地の寺に住職させて貰いました。私は京都在学中、私の先々師（現在住寺の先々代）吉永賢融大僧正が京都の清浄華院より黒谷光明寺へ転置せられました当時、この両本山に置いて頂いて学校に通い、寺用のできた時、この奥池田の寺へ帰りました。電車の駅より二里の山道、往復四里を四年間程通いました。これが私の健康に役立ったのかも知れません。昭和六年十月師籍をつぎ、当山に住職してより、また、京都の関係学校に通いました。

昭和十二年の頃、支那事変の勃発した時でしたが、椎尾弁匡先生に時々御講演に御来山を願ひまして、その頃、先生が煙草をお止めになったことを承り、私も何とかして止めねばならぬと決心し、同年七月の蘆溝橋事件を機会として、禁煙

しました。それまで私は非常に煙草が好きでしたから、四五年程、さびしく苦しみました。しかし、肉体がだんだんと肥えて来たのです。これがまた、私の健康を増進したかも知れません。

昭和二十五年から三十一年まで仏教大学々長に就任中、やはりここから、京都へ通いました。昭和三十七年十月、仏教東漸欧米親書使節団の中へ加入させて頂き、各宗の名師と共に布哇、アメリカ、欧州を廻り、羅馬にて一行とお別れして、単独にて、巴里へ帰り、四十年前に通いました図書館へ十日程通い、重要な梵本を調べました。同年十二月下旬に無事帰朝しました。

昭和四十四年一月、中外の印度仏蹟参拝団に加わり、印度仏蹟参拝、四十年前、参拝出来なかった釈尊降誕地、ルンビニーや、カトマンドウーにも参ることができました。途中、ペナレスの駅で汽車に乗る際、夕暮の電灯の暗い中で、ブラットホームに横えてあった鉄棒につまづいて前向に倒れ、鼻血を出しましたが、大事に至らず、一行と共に無事帰国が出来ました。その時数年八十一才でありました。私は最近、リウマチに罹りかけたようです。これがひどくなれば健康とはいえませんが目下療養中であります。

中 島 真 孝

(東京青山梅窓院住職)

「強靱な身体と強靱な意思力」

これは私が青年期にアメリカに勉強に行った時に自らの生活によりて学び取った人人生活の指針であります。私は教師時代に随分これを学生や生徒に語ったことであります。

戦災によって私が校長をしていた芝学園が全焼して、近くの麻布学園にお世話になっていた時、その麻布学園から帰宅する途上、ふと考えしました。

「しかし、それは二十数年前の私の若い時代の昔語りである。今の私にその「強靱な身体と強靱な意思力」があるか。自分自身にないものを他人に説いてはならない。今の私に現にあることを実証しなければならぬ。よしそれを実証しよう。」そして始めたのが早朝五時起床、水浴、体操です。昭和二十一年十月一日のことであります。それから二十数年間、特別の支障のない限り実行して参りました。お蔭で健康を保っています。

二、三年前、親しい人々への年賀状の端に次の歌を添えて

お送りしました。

われこそは長寿マラソンの選手よと

人生街道静かに歩む

強いて長生きをしたいとは思いませんが、人間として生れて来た以上は、出来ることなら長生きもしたい、それで前記のような歌を書き添えたのであります。幸にして健康に恵まれまして八十歳になりました。

み仏の名を讀えてあらまし

八十路の坂を今越えて行く

詩に泣きし若人の我八十路にて

心をさめて念仏申す

遙けくも来つるものかな今更に

ただ有難し念仏申す

徒に長く生きた処で意味がない。出来ることなら健康を保って、少しでも世のため、人のために尽して行きたい。それには規律ある生活をしなければならぬ。それで早朝五時起床、水浴、体操を続けたのであります。

ところが八十歳を過ぎ八十二、三歳ともなりますと、流石に体力の衰えを感じます。昨年のことです。

苟の風邪ならんと床に臥し

十日を過ぎて微熱は去らず

自分では元気でいる心算でも、矢張り年齢には、かなわないと気がつきました。

老の身は老の身なる理^{こと}わけて

老をいとへと己に教ゆ

無理はいけない、年齢相応に生きて行くことだと考えました。

早朝五時の起床水浴体操は

わが年輪に相応わじと思う

それで、目下、起床は朝五時三十分、水浴は中止いたしました。体操だけ続けています。幸にして今のところは健康であります。それが何時まで続きますことや。無理はしないことに致して居ります。

佐々木 孝 丸

(東京調布市在住)
劇 作 家

これという特別な健康法をもたないのが私の「健康法」です。即ち無手勝流であり、開けっぴろげであり八方破れです。若いときには随分無理をしましたが、ここ十年来、すべ

ての面が無理をしないように心懸けています。つまり、出来るだけ自然に逆らわないようにすることです。酒も飲みますが、血気に逸った若い頃のように、徒に酒量を誇るような向う見ずな飲み方はしませんし、煙草もやりますが、一日ほんの二、三本というところで、これとて、煙草は肺癌のもとになるとか、ニコチン中毒がどうかという予防医学的な見地から意識的に「節煙」しているわけでは決してなく、只、ほしくないからのまないだけの話で、仕事で疲れたあとや、やっかいな会議の席などで、のみたくなれば遠慮なくスパスパやります。

大体に於て寝つきの良い方ですが、それでも、時には、面倒な考えごとをしたあとなど、妙に頭が冴えて眠れないようなことがあります。しかしそんなときでも、睡眠薬又はそれに類する薬を用いたことは一度もありません。要するに、飽くまでも肉体が（同時にまた精神が）自然な眠りにつくのを待つだけのことです。

といへば、私という人間は、皆目、病苦というものを知らぬ「自然児」のごとく聞えるかも知れませんが決してそうではありません。私にも持病——というほどでもないが、それに類する疾患があり、胆嚢のはたらきが完全でなく、時として、そいつが私の身体をいためつけます。そんなときには、

やはりお医者様の世話になります。御世話様になる以上、完全にお医者様に任せきります。決して我意を通しません。

どうも、凡下の中の凡下である私などは、肉体的にも精神的にも、難行苦行を試みて、悟りの境地に達するなどということは絶対に出来ないで、あるがままの自然の欲求の中で、群り襲う煩悩に抗し切れず逆に切れず、五濁の河の中で無理な泳ぎ方をしないで押し流されるままになっているのが、却って、健康を保つ所以であるような気がしています。

「不断煩惱得涅槃は」親鸞聖人の御言葉（正信偈中の）ですが、御叱りを受けるのを覚悟で申そうなら、私の場合は、「不断煩惱得健康」であります。

森 赫 子

（東京都渋谷区在住）
元 女 優

私は小学校一、二年の頃には、秋の運動会のマラソンで一等になつて賞を貰ったり、女の子が泣かされて来ると、苛めた男の子をやっつけに出掛けて行くという御転婆だった。五、六年になつてからも、お休み時間等友達とドッチボール

に夢中だった。

ところが、紫の着物に紫の袴を穿き、姉と一緒に女学校へ通い始めると、ちょうど大人への転換期でもあったのか、私は急に大人しくなり運動は嫌いになってしまった。

卒業して肺炎を患い半年程、ぶらぶらしていたが、女優になると芝居やら遊ぶ事やらに忙しく、舞台の埃や不規則な生活が疲労を重ねる結果になったとしても、健康など顧みる余裕もなく、若さと精神力で突っ走っていたような気がする。

加えて戦災で家を焼かれ、食糧不足は栄養不足となり、遂に目を煩い医者通いが始まった。

私の体の中は薬だけではないかと思う程、何年も毎日、注射や薬を浴びる様に続けたが、雲の降る寒い冬の日医者に見離され失明した。

人生のどん底に叩きつけられた私は、もう医者や薬に助けられる事はあっても、頼り切る事は出来ない事を知り、心配する母でさえどうする事も出来ない事を知り、自分の重荷は自分で背負って行かなければならない事を知らされてしまった。

二十年間の舞台生活を捨て、やっと諦めと覚悟の様なものが出来、新しい静かな道を歩き始めると、私は少しづつ元気

を取り戻して行った。

その時私はもう四十を過ぎ、人生の後半にさしかかっていたが、次第に年齢の衰えを感じ始めていた。

若い頃、無理をした傷跡も辛いが、自然に与えられる年齢の衰えも又優しく厳しい。

今でもあまり丈夫でない私は、冬になると真っ先に風邪をひいたり、一日山の強い日差しに照らされて日射病になり、高い熱を出してしまったり、時々失敗をする。

そこで今考える健康法は、まず十人十色と、それぞれ違う自分自身の体をよく知る事であり、弱い所は無理をしないで守る事と、一方、自分の体に合った訓練なり運動なりを、日常生活の中で続けて行く事ではないかと思っている。

毎朝、窓を開け放して、食事の片付けやら、掃除やら、月に二、三度は山の近くの空気の良い所で歩き回るのが、今の私の運動になっている。

でも、健康そうな人がぼっくり亡くなれたり、弱い弱いといいながら永生きをする人もあるのだから、自分の体を上手に扱って行く事は、人生の大切な技術なのかも知れない。



一枚起請文講説(1)

井川定慶

(文 博)

一、由縁

元祖法然上人には多数のお弟子が居られました。其の中で、平重盛公の孫にあたる勢親房源智はいつも上人のお側に侍つてい乍ら法門を承りつつ、常隨給仕の役をなされていた。

ところが上人が御流罪より許されて京都にお帰りになった翌年即ち建暦二年正月の早々より御不快気味を拝せられ側近の源智は一しお心を碎いて看護にあたっていたが、正月二十三日になると、どうも終焉も程近いと予想

せられたので、御病体には無理な願いではあるが、「念仏の安心について年久しく御教誡を蒙つてはいるけれども、此の際上人の御自筆を以て肝要な御所存を一筆書き示され給わりたい」と懇望したところ、上人は快よく御

ひきうけ遊ばされ重いお頭を上げ御寢床におからだをもたげられ、筆硯をとりよせ一枚の紙に浄土宗を別開せられた由来から始め、念仏申す人の心がけ、そして口称名号の中には三心も四修も五念門も総べてが籠っているということを認められて、念仏信者は常日ごろ決して智者の振舞いなどせずただ一向に念仏を申されたい。私の所存は是れ以外にありま

せぬ。その証拠に昔からの例にならって「両手の印を捺しておきますよ」と起請の形式をとられているのです。

此の原本は源智が知恩院第二代を継いで保存していたのでしようが、其の後どういう怪路をたどつてか、現在は黒谷の金戒光明寺に秘藏されている。

ところが、此の「一枚起請文」に書き記されている趣旨が「筑紫物語」にも載せられているからそれより先きに浄土宗二祖鎮西聖光上人にも書き与えられていたことでしょう。また、黒谷本と勸修御伝巻第四十五に載っているとところを比較しますと、多少字句の出

入がありますから、元祖上人は一枚起請文（黒谷本）と同趣旨のことをあちこちで話をしていられたのでしよう。元祖上人の得意とせられるまゝたつた御法語と申すべきです。常隨の源智はその間の事情をよく知つていたから御終焉を控えて、自分にもあいつも仰せ出される御法語を私のために書き記し頂いて末代までも念仏弘言のテキストとしたいとおねだりしたのかとも考えられます。

二、観念の念仏と口称念仏

一枚起請文の最初に

もろこし我朝にもろもろの智者たちの沙汰し申さるる観念の念にも非らず

とありますが、「もろこし」とは「もろもろの山や海を越えて」という即ち「外国」です。ここでは中国唐を指していられます。

中国にも随分とお念仏を弘められた高僧達がいられます。印度から渡来した浄土教をうけ継がれたのは曇鸞大師、道綽禪師、善導大師、懷感禪師云々相承された系統とは別に盧

山で白蓮社という集いをつくつて浄土の行業を修し戒律を護持し禪宗を修行せられた慧遠法師という大徳もあります。

また懷感禪師よりおかれて承遠がありその門下に法照禪師が出ているし、善導大師の門流から少康法師もあり、唐中宗皇帝の頃に慈愍三蔵が五天を渡渉して浄土教を盛んに唱導していられる。

次に「我朝」に於ける念仏の先達と申せば是れも沢山いられる。

善光寺縁起を拝読すると我が国に仏教が伝来した時から阿弥陀如来像がまつられていた。それが聖徳太子に至ると無量寿経（三部経の最初に拝読する御経）をよくお説みになつて御自分の著書に引用されているし、唐の学問僧惠俊は舒明天皇の為に無量寿経を御前講読をされ、奈良朝になると元興寺極楽坊の智光は浄土曼陀羅を描き、中将法如は阿弥陀如来の化尼となられての御手助けを蒙つてあの有名な当麻曼陀羅を織成しているし、聖武天皇は六時礼讃を宸写せられ光明皇后の七々日には諸國に阿弥陀画像をまつられるといふから奈良の時代には善導大師流の浄土教が

相当流入し信仰せられていたことでしよう。

平安時代に入ると天台宗の伝教大師も次の慈覚大師も四種三昧の随一たる常行三昧として念仏行道の修法をなされているし、真言宗の弘法大師は其の著「性靈集」に阿弥陀の信仰を記され、新義真言の開祖興教大師覺鑒上人は遠く九州の郷里にある母親へ「孝善集」三巻を書き記して阿弥陀浄土の教えを論じ送られている。

恵心院の源信僧都に至ると往生要集を撰述されて弥陀来迎を説いて盛んに念仏の法門を高揚せられた。

恵心院源信僧都は凡愚の得脱は唯だ往生極楽の一途のみとし往生要集の中で十門に分別され、一厭離雜土、二欣求淨土、三極樂證拠、四正修念仏、五助念方法、六別時念仏、七念仏利益、八念仏証拠、九往生諸行、十問答料簡、その中第四の正修念仏と第五の助念方法の二門が重要であつて、正修念仏門には五念門を明しそこでは作願と觀察の二門を主要となし、助念方法の中には三心四修を具足すべしと説かれている。

ひとすじに生きる



高 橋 信 道

(群馬県太田市教受院住職)

初春を迎える毎に、「今年こそは」という思いに胸ふくらませながら、やがて一年を過してみますと、失望と慙愧にかられること歳々の事柄でもあります。「元日やまたうかうかの初めかな」というように、そのうちには希望も決心もどこえやら、本当の生き甲斐ある人生の夜明けを迎えるがごとき心地は失せてしまい

いくたびか思い定めてかわるらん

頼むまじきは心なりけり

と悲痛の感にうたれた古人の心根に共鳴させられるのであります。お互様、物の道理を聴くときはもつともと納得しても、さて実行となり、殊にそれを永続して平常の行為となす

ことはなかなか至難なことといわねばなりません。自分の力を信じ、みずからの力によって切り開いてゆく努力は大切に違いありませんが、それが過信となり、謙虚さが失われて思い上ってしまい、摂理を忘れ去ったときの人間一個の限界のあることに思いを致さねばなりません。私たちが完全な生き方をしようとするためには、是非とも偉大なみ力、それは私たちを生かさんとする阿弥陀仏の本願力を仰ぎ、そのみ力をいただいてわが力として進むよりほかに、救いの道はないのであります。

このゆえに、元祖法然上人は「ここにわれらがごとき無智の身はひとえに弥陀のみ力をたのむ」と仰せられました。しからば、阿弥陀仏のみ力を、私の力とするにはいかにすべきでありましょうか。

阿弥陀経には「一心不乱」といい、無量寿経には「一向専念」といい、善導大師は「一心専念弥陀名号」とお示しになっております。

一心専念弥陀名号と一心に阿弥陀仏の大慈悲を仰いで精進いたしますと、大願力の加被するところとなり、かならず私のような弱いものにも強い力をあたえ、煩惱尽重の凡夫の生活が浄化され、たくましく生きる力が漲ってくるのであります。火のそばによれば温かくなり、その火の温かさが私のもの

のとなるように、また水の側によれば冷たくなり、その冷たさが私の体のものとなるように、慈悲に交われれば慈悲の人、徳に交われれば徳の人、み仏の大慈悲にふれるならば、おのずから私の心と感應して、浅ましい弱い心も靈化を蒙ることができます。すなわちみ仏のみ力をわが力として生まれるのであります。

「出離の縁あることなし」とは、善導大師の仰せられた自覺の信仰の告白で有名な言葉であります。この一句を自身に照らして反省してみますとき、うかうかしてはおられません。そこにこそ一心専念、み仏のみ力を仰ぐ信仰が湧き上ってきます。まことに常に没し常に流転して永遠に助かることのできない迷いの私であるということに気づき、目が醒めたとき、阿弥陀經に示されている、阿弥陀仏およびその人民も無量無辺と仰せられた無量寿の真生命に甦がえることができるのであります。助かる力のない私が、大慈悲の救いの力のなかに助けられつつある私を見出したとき、私の心は敬慕の情にあふれ、よろこびいさんで善心おのずから生ずる法悦に遇うことに合掌せずにはおられません。たとえば、毬をつくときに力づよいほどはねあがることも高いように、私のすべての力では、出離の縁あることなしとすべてを捨てることが強ければ、弥陀攝取のみ手に高く救いあげられるのです。

いいかえますと、信仰生活というのは、自分の力で生ずることではなく、み仏のみ力によって生かされて生ずることです。罪にけがれはたれた私の心に、如来の光臨しますということは、あたかも太陽が汚されずに物を治める力のあるように、如来は私たちの罪に染められずに、私たちの罪を清めてくださるのです。しかしながら、私たち自身が現に罪惡生死の凡夫という自覚がないときは、み仏も救い来ようとしても救い来たることはできません。あたかも、水なき池に月降り映ることができないと同じことであります。罪ある私を救い清めんために来迎するみ仏でありますから、私が罪にゆきずまり罪に泣き、罪にもたえ、罪のおそろしさに目覺めたとき、心の底より救いを求める南無の叫びを聞かれた如来はそこにこそ応声即現して攝取してくださるのであります。私たちが、罪の自覺の深くなるほどに如来のみ心が明きらかに解つてまいります。

法然上人が「われはこれ烏帽子もきかざる男なり、十惡の法然愚痴の法然房が念仏して往生せんと云うなり」と仰せられて、罪の自覺のもつともつよい聖者として、そこに一生涯をつらぬいて、一心専念の行者として生きられたことを思い出すとき、私のごとき凡夫は、なおさら一心専念のひとすじの生き方をつよく心に決めなければなりません。

孝子善之丞物語

《第六回》

吉田光覚

(岩手県紫波・極楽寺住職)

(一) 夢が覺めて

地藏菩薩に従つて極楽世界を限なく見物した善之丞は、矢を射るように下界へ下つたと思つた瞬間、気がつけば満勝寺村の坂町觀音堂の拝殿であつた。一日一夜のことではあつたが、彼の心中には一年以上も経つたように思われた。

今迄になく違ひのを案じて、母は途中まで出迎えたが、元氣なわが子の姿に安心して母と子は並んで歩いた。善之丞は地獄極楽を見て廻つた夢のような話を、ポツポツと母に語つてきかせた。不思議にもいつもの、どもりが治つていき易いのには母はおどろいた。

(二) ひとときの懺悔

父善四郎は、自分が未だ生きているのに姿だけが地獄へ先行して火の車上で苦しんでいるなんて「そんな馬鹿なことがない。」と信じないばかりか、炉端で湯薬を煎じ乍ら仏法を悪様にそしめるのだった。すると自在鍵に掛けておいた素鍋が、鍵から外れて梁の上まで舞上つたと思つたら、反対に、ガチャンと炉中に転落した。まのあたりこの怪異をみせられてはさしもの善四郎もおののき、やにわに表へ駆け出して井戸へ行き、水垢離をとつて「南無地藏大菩薩、只今の疑念の科を許させ給へ」と一心に懺悔した。

それからというものの善四郎無能和尚に帰依

して右の次第を申上げ日課三万遍を授かり、酒肉五辛を断つたという。母と弟源之助も日課一万五千遍を授かつた。こうして一家揃つて念仏信仰に勵んだため、半年ほどでさしもの癩病も殆んど快癒したのであつたが、無能和尚が亡くなられてからは、(享保四年正月二日)善四郎は切角の信心も自然とゆるみ、日課も怠り、誓約も忘れてしまつたので、本病が再発して遂に死亡した。

(三) 無能上人の勸化

無能上人は示寂前に、聴聞に來た善之丞に言われたことがある。

「お前は千古に類例のない感応を蒙つたのだから剃髮染衣して往生を願つてはどうか」と、それで出家の志を抱くようになったが、貧しく忙がしいわが家のことを憶うと、容易に踏み切れないでいた。上人の遷化後は何回となく墓参をして教えを忍んだ。或夜の夢に上人が現われて

「汝孝行の志深切なるゆゑ、地獄極楽を見せたのも皆、我の所存である。我は極楽上品の地藏、仮に世に出て衆生済度したが、濁世の

凡夫の習いで念仏往生を疑う者少くない。依つて汝に地獄極楽を見せて現身の実話によつて、諸人の信心を誘発し済度の本懐を遂げようとした善巧方便である。鐘の音をきくときは極楽の音楽と思ふべし。衆人集まつて念仏するときは聖衆の来迎と思へ。行住座臥、西方に向つて念仏策勵すべし」と。

(四) 出家得道

又或夜、いつか観音堂でお神酒を頂いた上廊の女性が現われ「汝信心堅固に念仏して極

楽へ来れ、我は坂町観音菩薩なり、彼土にて対面すべし」と光を放つて飛び去られた。こうした示現が善之丞や家族の上に再々あったので、母の許しも出て遂に善之丞は出家得度をした。二十才前後と思われる。

桑折大安寺にて厭求和尚の下に剃髪し、名を直往と改め、実家の側に四坪ほどの庵を建て（現存）念仏三昧に耽り訪う者に地獄極楽感見の話をしきかせた。元文二年三月十五日数日前より断食して別時念仏を勤修し、正念に往生の素懷を遂げたのである。世寿卅六才であつた。

(五) 善之丞の体験記

生前、善之丞は予州安西の往生記の内、極楽の絵をしつと眺めていたが、にわかに大声でワツと泣き伏したという。

厭求和尚に語るには、宮殿に雲のかかっている当り自分が見た極楽とそっくりなので思ひ出して有難さにとり乱したのでと。又、或夕暮れ、庵室で頼り

に涙を流すので、「どうした」と問えば、「地獄で修羅道を通つた時、遙か谷間で罪人共の泣き悲しむ声かすかに聞えたが、丁度今、表で沢山の蚊が集つて泣いている声とそっくりなので、あの哀れさを思ひ出して忍び難かつた」と。

こうした善之丞の地獄極楽の感見を、相馬興仁寺に於いて、諸長老や近辺の道俗男女多勢集まつてきくことになった。

善之丞は偽らず飾らずに一同に話した。側では厭求和尚が速記をした。その速記の終りに善之丞は次のように誓約して証明している。

三所参詣の間仏神の感応種々の怪異殊に観音堂通夜の節感見の地獄の呵責浄土の莊嚴等少も偽言を加へ申候はば、一切諸仏菩薩地藏大士日本国中神祇冥道の御罰を蒙り八万地獄隨可申候 仍誓言如件

享保八卯年九月十四日

奥州伊達郡南半田村
行年二十二歳直往敬白

(終)

善之丞祈願の観世音（丈六・重文）



学者は絶えず未知の世界の開拓に汲々として、人類の幸福のために尽して貰っていることは感謝に堪えない。しかし如何に科学が進歩しても広大無辺の大宇宙を征服することは人智の及ばないところである。

カントは空に輝く星と良心神秘なものはないと申した。この神秘の世界にわけ入らんとして苦悩した十八歳の哲学青年藤村操は、遂に望を失って華嚴の滝に身を投じた。嚴頭の感は「悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以てこの大を計らんとす、ホーレツショの哲学、何のオーソリチーに値するものぞ、万有の真相は一語にして尽す、曰く不可解」であった。神秘の世界は人智のよく及ばないことを告白している。

人間が絶対でない限り如何に頭脳明晰でもいつかは相対的の弱さを感じる。如何なる達人でも人間である以上絶対と価値つけることは出来ない。不安に遭遇すれば安全を祈る心が出るのが人の心の弱さである。

源平の戦で須磨の浦の扇の的は、弓の達人

科学の進歩と念仏

＝鎮西学国長＝

上 田 貞 雄

須磨宗高でも彼の心はおだやかでなかった。敵前に恥をさらしたくない武士の一念から思わず南無八幡大菩薩を念じたと伝えられている。如何なる達人でも人間である以上、絶対と価値づけることはできない。この頃、タクシーに乗れば例外なく運転台の前に何かのお守りを下げて安全を祈っている。如何なる名運転手も心の弱さを持っている。そこに宗教とか信仰とかいうことが考えらるることになる。

近來、わが国民は宗教を知らない国民との批判を聞く程、宗教には無関心者が多い。

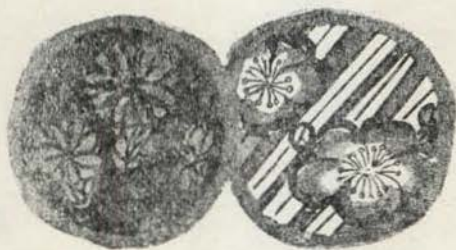
明治維新以来、物質文明の輸入に目がくらみ精神面の修養は忘却されたかたちであった。寺参りは年寄（老人）の暇人の暇仕事で、若い者の行くところでないとして軽視した。この点は欧米に於ける日曜日に教会に出かけて祈る習慣とは裏腹である。これが百年後の今日、宗教知らぬ国民という謗の原因となったと思う。

科学の進歩は喜ぶべきことであるが宗教を

知らぬ国民の非難は国辱である。如何に機械文明は進歩しても、人間が造った機械から人間が使われ、人間疎外という言葉さえ聞くようになった。この傾向が続けば国家も、家も忘れ、すべて断絶時代となり利己一天張りの精神的亡国の憂なきにしも非ずと考えられる。

科学の発達、物質の文明はよいが心を忘れ精神を軽んずる事は亡国の基である。

法然上人は十八歳から四十三歳まで黒谷の法恩蔵（仏教の図書館）で勉強されて、叡山第一の学匠叡空上人も頭を下げられた大学者であった。しかしながら学問では救われないことを御自覚になり、還愚の念仏をお勧め下さった。還愚念仏とは馬鹿の申す念仏ということではない「たとえお釈迦さま一切を法を知り尽している大学者でも、念仏申すときには用事はない、しばらく学問は棚の上に上げて、無邪気になって念仏申せ」と仰せられた。無邪気とは、赤ん坊が母親の懷の中で乳房を



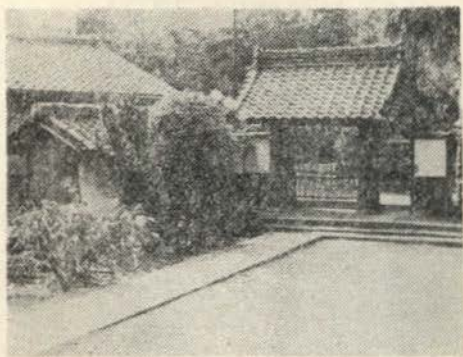
吸うありさまである。道理、理窟は知らなくても唯乳を呑むところに血となり肉となつてゆく。阿弥陀さまのお慈悲の懷に抱かれて念仏の乳申すところに、やがて仏果菩提の妙果を得らるものである。「唯申せ申すばかりがつとめて浄土の壮嚴見るぞうれしき」とは元祖の御述懐である。

最も簡単にして、最も功德広大な修養法は口唱念仏である。学者はペン執りながら、職人はハンマ振りながら、農家は鋤鋤とりながら、身と口と心の暇に任せて助け給えと念仏申すことである。

法然上人の理想は遠大で往生極楽が目的であるが実行は今日主義で日課称名である。

いかなる知識人でも絶体の力にひれ伏していれば、心の平衡を保ち、落ち着いて心のやすらぎの中に研究も殖産興業の発達も計られる時機相應の教が法然上人の口称念仏の教と確信している。南無阿弥陀仏

合掌



＜新福寺境内＞

異僧「真覚」

第二回

柴田 六五郎

（滋賀県近江八幡市在住）

らの手で戒名は勿論命日まで刻んで、寺の墓地に建てておいた自分の墓石の下に、今、此の紙子を埋めようというのだ。彼はそれをおもむろに押し拵げた。

“無い”

驚いた彼は自分の眼を疑った。そこには、尼僧裸形はおろか描線の痕すら見出せない。彼はよろめく脚をふみしめつつ、まろぶように戸外に出ると、黄昏の残照に映える空にこれを透かし見た。

八十三歳の老僧真覚は、比叡山の肌を裂るような寒さともわず、ワサワサと音を立てて紙子を脱いだ。その紙子には、若い女の裸の様々な姿態が描かれていた。事もあるうに尼僧のそれが……

「今日は正月の二十五日、元祖上人の御命日だ。わしのような者でも、法然上人にあやかっ、出来ることなら今日中に往生させて貰いたいものだ」

ふとそんな考えが浮んだ彼は、もう二十年余りも前に、自

真覚が生れたのは、明和二年（一七六五）近江国瀬多庄大萱村（大津市瀬田町一里山）である。深田清次良の八男として生れた彼は、いとも簡単に清八と名付けられた。百姓に男手は必要とはいふものの、男児七人をもつ清次良は、彼をいささかもて余す気持であつた。漸く乳を離れる頃、法事の席

で顔を合せた本家の治兵衛が

「俺んとは男一人で、あとは女子おんなこばっかしじゃから、其奴そいつもろてもええで」

と声をかけてくれたのを渡りに舟と、犬の子のように呉れてしまった。

治兵衛に引取られた清八は、その家の子供達と何のへだてもなく、ころころと犬ころろのように遊びほうけて育った。彼が何となくちぐはぐなものを子供心に感ずるようになったのは、十歳から月輪の新福寺和尚のもと（所謂寺小屋）へ、読み書きを習いに通わされるようになってからである。習字も下手であったが、物覚えは人一倍悪く、十四人の子供仲間でも最も劣っているようであった。和尚はいつも、彼を自分の真ん前に坐らせて、彼が質問に答えられずモゾモゾしているとき、遠慮会釈もなく、木魚のバイで頭を叩いた。毎日木魚を叩いている和尚のねらいは誠に正確で、ボンノクボの一寸前いちすんまえを外れたことはなかった。叩かれるたびに鈍い音がした。彼は叩かれる痛さよりも寧ろその鈍い頭の響に我ながら腹立たしい思いであった。毎度のように叩かれる彼を、子供達は面白がった。

「今日は七つや」

「いや八つやった」

と勉強が終った途端、頭の音を数えていた連中がはやしたてた。そんな時は平常ふだから重い口が一層重くなって、黙りこくっていた。黙っている彼は、それでもその日の学習を一生懸命に反芻はんそうしていた。彼の記憶力が、その機能を働かせるには常人の三倍位の努力が必要らしかった。然し一度記憶したことは又絶対と言っていいくらい忘れることも無かった。

「清次良さんの子、おやのに、こんな末成りの蔓つたまくりとは思わなんだ」

と、養母のおちまが治兵衛にこぼすのを、通りすがりに障子の外で耳にした清八は、自分が治兵衛とおちまの子でない事を初めて知ると同時に、二人に余り快く思われていない事を察知した。

愚鈍ぐどんで而も陰気くさい清八にも、年に一度は楽しい日があった。いや、楽しさを通り越して得意の絶頂とも言えようか。それは、お盆がすむと間もなく迎える地藏盆であった。此の日ばかりは、和尚も平常ふだとはうって変って終日ニコニコと子供達の地藏祭りを見物していた。寺の門に入ってすぐ右手に地藏を祠ほくらった小さな堂がある。バケツで水を運ぶ者、花をさし替える者、畳を拭く者、誰言うとなく子供等は仕事を分担して準備に大童である。持ち寄った葎わらが堂の前に五六枚敷かれると、子供達は例年のように本堂から、ガ、モンと呼



〈新福寺地藏尊〉

んでいる大鑿^{きん}や伏せ鐘を運び出して並べた。気の早い連中は、はやばやと胡木を執って叩き始める。その頃から清八の特技が仲間の歓声をよぶのである。境内の敷石に、ずらりと並べられた西瓜、南瓜、胡瓜、加茂瓜、唐もろこし、赤く長い薩摩芋、茄子等を彼はもっともらしい顔付でながめ廻した。彼の手には（今日ではもう殆んど見かけることもない）切り出しナイフが握られている。一巡した彼の手が、サッと南瓜をつかむと、小指ほどの穴を無数にあけてゆく、

「清やん、それ何作るね？」

無言である。聴こえたのか、聴こえないのか、表情一つ変えず彼の作業は進んでゆく。人間は往々にして、苦境に在る時と同様、得意の絶頂時も又寡黙になるものらしい。清八のそれが何れに依るものか定かではないが、彼は片時も手を休

めない。二十個余りの茄子が、するするっと藤の蔓に通されると、とてつもない大きな葡萄の房になった。

「うわあ。葡萄や、葡萄や。こんなでっかい葡萄食べたことないわ」

「阿呆っ。太吉の食いしん坊」

「なにっ！ ほんならお前もこんなでっかい葡萄あったら食べたいやろが」

「ほら、あつたら食べたいわい」

「ほんなら同じこっちゃないけ。お前もやつぱり食いしん坊や」

「わっ」と周りから歓声があがる。そんな中で清八は、むっつりした表情を変えることなく次々と材料を処理して倦むことを知らない。加茂瓜には眼と口を開けてさつま芋の皮を挿し込んだ。頭から額に垂らしたのは、唐もろこしの毛である。これに和尚の着古した白衣を着せると、結構赤い舌を出したお化けらしいものになった。一時余りもすると、集まった材料は皆それぞれに所を得てキレイに取まってしまった。唐もろこしの柄は鯉のほりの矢車になって竹竿の先に乗っかり、残りの毛は、少さなむく犬になって地藏さんの足もとにチョコナンと坐っている。胡瓜はいくつも連なって青大将に化けるといった具合である。

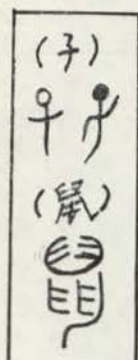
猪突猛進の亥の年を送って、こんどは可愛い子の年を迎える事になった。確かに昨年は、日本全体が沖繩国会ということもあってこれが成立には猪突猛進をした年であった。そして、いろいろな事件が日本中をゆすぶった。中でもドルショックなどは、猛進する日本経済に、大きなブレーキとなった。こんな年を送って迎えた子の年は、果してどうなるのであろうか。

子の年は鼠の年といわれている。これは毎度いうように、十干十二支から出てきているもので、子を鼠に当てはめているのは、古く中国の漢の時代からのことである。しかし、子には一向に鼠の意味はない。子は字の通り子供の子の字であり、図にかかげておいてよく丸坊主の子供が、左右の手を動かしている象形文字である。鼠などというのとはとんでもない事である。

ただ古く、子は潑であるとして、潑は万物が芽ばえ、しげることに解されている。そんなことから、鼠がさかんに子供を生み、鼠算的にふえていくことにでもちなんだものであらうか。鼠算といえは、正月に十二匹の鼠が

いたとして、この十二匹が毎月十二匹づつの子を生み続けるとすると、どれ程になるであらうか。なんとそれは、二百七十六億八千二百五十七万四千四百二匹にもなるそうである。全く恐ろしい数字である。この頃は産児制限で日本人も余り増えないようであるが、

子の年



安居香山

それでもこの小さな島に一億もの人間が住んでいるという事であるから、鼠ではないが、大移動でもない限り、とても生きて行けないということになりそうである。

しかし昔から子宝というように、やはり人は多い方が賑やかで楽しい。

少し子供の話に横すべりしたが、鼠といふこの字も実は図に示したように鼠の形にかたどったもので、上は口の中にある鋭い歯をあらわし、下は腹や爪や尾をあらわしている。ガリガリと戸板をかじる音を聞きながら寝ていた子供時代を思い出すが、この頃では、とんとそうした事もなくなってきた。鼠や蛇は家の主で、これがいたくなると、大地震とか火災が起る前兆であると聞かされたこともあるが、この頃のように彼等がいなくなると、兇災の予防もできないこととなる。

鼠と言えは余り喜ばれる動物ではない。しかし、童話などに出てくる鼠は狐や狸ほどに悪い動物でもない。寧ろベットの可愛いい物語の方が多い。鼠の嫁入りなどという楽しい絵などもよく見た。又鼠の女の子が、鼠のところに嫁にいくのをきらひ、もつと偉いところに行きたいと願ったが、一番強いのは鼠で、鼠も倒せぬ壁に穴をあけるではないかと説明されて、納得して鼠の所に嫁に行ったというような話であった。身分相応とでもいう事であらうが、子の年にあやかた可愛い楽しい年であるように願いたいものだ。

新年賀謹

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

大正大学

理事長 鶴飼隆玄
学長 芙蓉良順

仏教大学

学長 藤原了然

大阪市天王寺区上之宮町二六の二

学校法人

上宮学園

京都市家政短期大学

学長 三枝樹正道

淑徳短期大学

食物栄養学科・社会福祉学科

東京都板橋区前野町五の三
電話(九六六)七六三一(代)

東山学園長

藤原弘道

華頂学園長

水野隆樹

鎮西高等学校校長

真和中学高等学校長

上田貞雄

社会福祉法人竜雲学園

細井照道

高松市仏生山町法然寺内

長崎市 大音寺

本原義岳

明治天皇明石行在所

光明寺

住職 山口諦存

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

原口徳正

東京都渋谷区幡ヶ谷二の三六の一

清岸寺

竜原寺

前田成孝

東京都港区三田一―一三一―一

電話四五―一〇七六五

だん王法林寺

信ヶ原良文

番京都・三条大橋東詰

鎮西流根元地 聖光寺住職

小林忍戒

年 新 賀 謹

稲岡 覚順
川口市北町二五〇
西福寺

戸川 靈俊
京都市左京区黒谷町西住院
大阪工業大学・東大阪短期大学

浄土宗保護司会理事長
浄土宗議會議員 西信寺

栗本 俊道

真仏教舎教団本部長

裏辻 賢洲

福岡市外福岡町松原山大善寺住職

静岡市鷹匠二丁目二四番一八号

華陽院 堀田 良謙

電話〇五四二―五二―三六七三

菊名蓮勝寺住職

柴田 敏夫

横浜市港北区菊名町五二一

弘前市新寺町 貞昌寺

浄土宗議會議員

赤平 昌導

北川 一有

長寿院

台東区鳥越二―十三―十八

宗議會議員

飯田 信弘

四日市 光運寺

白幡 憲佑

横浜市南区庚台

久保山 光明寺

総本山知恩院
大本山増上寺 布教師
善光寺大本願

小布施 弘学

長野市松代町 長明寺

天光院

真野 竜海

新住所名

東京都港区芝公園一―三―一六

株式会社 安藤 藤

代表取締役 安藤 宇助

京都市東山区古門前通東山線
入西(千六〇五)

電話(五五) 五二一八六代(法衣)
五二一八六代(仏具)

東京都港区芝西久保巴町一〇六
の二(千一〇五)

電話(〇四) 三三三―一〇四二八

法然上人鑽仰会

浄土宗列祖の

墨蹟をたずねて

述聞見聞以口筆、委細令傳授早、

聊不_レ可_レ及_ニ他見_一、仍狀如件

元享四年 九月四日

良暁（花押）

これは四祖良暁の真蹟である。良暁は文永五年（一二六八）秋叡山に登り、修学し、同七年鎌倉に下った。同九年に師良忠より、悟真寺房地および免田武蔵鳩井庄を譲られた。そればかりでなく、弘安九年（一二八六）京都から帰った良忠から阿弥陀經・南岳相伝の袈裟・硯などを附屬された。次いで璽書・戒牒そして同十年六月には釈論などを禀承した。けれど

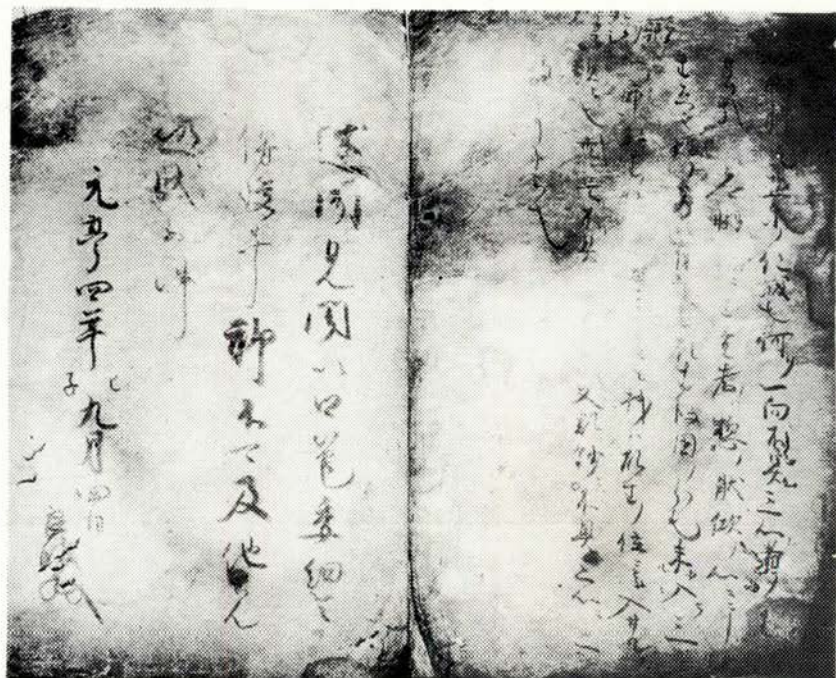
七月に良忠は寂してしまった。良忠歿後多い門下の中で大変だったのに相異なる。たとえば名越の尊観との論争である。それは「業事成辨」を中心として尊観の主張する一念業成に對し、隨機不定を主張した。結局折り合わなかった。そればかりでなく、正和二年（一一三三）秋船木禪門の請を受け称名寺開山となったけれど、その時の講筵を中心として、『口伝抄』を製した。けれど尊観はそれに対して『疑門抄』をつくった。そこで良暁は有名な『浄土述聞抄』を製して對抗したのである。

この写真は『浄土述聞見聞』一巻の奥書である。これによって自義を弁明したのである。元亨二年十月に『浄土述聞抄追加十一箇条』、同四年にこの『述聞見聞』、正中二年三月には『述聞制文』を製して、相伝の正義を正した。つまり白旗義の確立をなして重要なものであらう。

良暁の自筆は光明寺・新知恩院などにみられるが、みればすぐわかるといった書体である。一見弱々しくみうけられるが、良暁の伝歴からしてそうとは断定できない。父良忠の附法状、讓状のタッチとは趣を異なるが、人物を偲ぶに充分といえよう。右側の文などもこの時代特有のものといえよう。

性格と書体は一致するといわれるが、それぞれ微妙なものがあろう。

（田中 祥雄）



——良曉真蹟——

——『浄土述聞見聞』奥書より——

「浄土」購読規定	一部 定価 百円	会費一力年金一、二〇〇円 (送料不要)	浄土 正月号	昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十六年十二月二十五日印刷 昭和四十七年一月一日 発行 定価 百円	編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷人 関二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行人 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 振替東京八二一八七番 東京都港区芝公園十九号地の一 浄土宗務支所内 編集室 法然上人鑽仰会
-----------------	-----------------	--------------------------------	---------------	---	--	---

年 新 賀 謹

總本山 知恩院 門主 岸信宏 執事長 鶴飼隆玄	浄土宗宗務所	浄土宗宗務支所	大本山 増上寺 法主 大野法道 執事長 里見達雄	大本山 光明寺 法主 石井真峯 執事長 吉川哲雄 鎌倉市材木座六一七一一九
大本山 善光寺大本願 法主 一条智光 副住職 鷹司誓玉 執事 北川恵作	法然上人誕生地 誕生寺 岡山県久米郡久米南町町	港区南青山二丁目二六一三九 青山梅窓院 中島真孝 中島真哉	里見達雄	電話東京八一四局三七〇一番(代表) 檀林伝通院 東京都文京区小石川三丁目十四十六
大仏殿 高德院 鎌倉 住職 佐藤密雄	神奈川県葉山町堀内五六八 相福寺 明照幼稚園 杉田義俊	近竜寺住職 松濤弘道 栃木市万町二二四四 電話(〇二八)二二一〇八〇二番	祐天寺住職 巖谷勝雄 東京都目黒区中目黒五十二四一五三 電話(七二二)〇八一九 一五三	東京都大田区田園調布 照善寺 田丸徳成